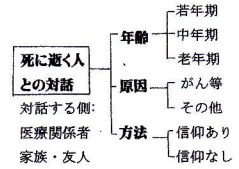


# 死に逝く人との対話

## — 死に逝く人の思い —



死生学研究会資料 ■ ③2009/11/3

<p><b>年齢*</b></p>	<p>若年期：3歳～5歳位、死は一時的なもの…。死んだらどうなるの？…等の質問。 6～7歳位以降、個人差はあるが、死を現実的に捉える。死の受容は悲劇的。 中年期：仕事や家庭生活に重点が置かれる。責任が重く、死の受容は相当困難。 老年期：子供達も独立…、多くは夫婦のみの生活…死を受け入れ易い人生の最終期。</p>		
<p><b>原因</b></p>	<p>がん等：告知から死亡までにかなり時間があり、最後まで思考が衰えず人生整理が可能。 突然死：事故、脳卒中、心筋梗塞等…本人は何もする事ができない。 その他：死亡までに時間があっても、思考が思うようにならない場合等。</p>		
<p><b>死の受容の方法</b></p>	<p>何かが残る。</p>	<p>信仰あり。</p>	<p>他力：キリスト教（イエス、神の国）、イスラム教（アッラー、天国）、浄土宗・浄土真宗（阿弥陀仏、浄土）等。 自力：禅宗（悟り）、真言宗（即身成仏）、日蓮宗（即身成仏）等。</p> <p>①天国（非宗教）で見守る・星になって見守る。 ②この世で生者と共存する（仏教）、千の風…。 ③もう一度人間に生まれ変わる。④臨死体験の経験…その他。 ⑤遺伝子が子供に受け継がれる（子供がいる場合）。 ⑥人が「生きて存在した」という事実は残る…その他。</p>
<p><b>死の受容の段階*</b></p> <p>↓</p> <p>終焉 (しゅうえん)</p>	<p>何も残らない。</p>	<p>信仰なし。</p>	<p>①死との最後の出会い…充実した生→良き死へ。②死は眠り…。 ③死ぬまで「死なない」と思い続ける方法。 ④死のことを忘れて行く方法。 ⑤<b>瞬生五十年・自分囃</b> (Jibunzu) による方法（禅的無）…その他。</p>
<p>初期：がん・余命の告知→頭の中が真っ白になる→否定・悲嘆・怒り→事実を認める（うつ…）。 死や死の受容の対話が大切（寄り添う）。…最後まであなたと一緒に…。(医師)</p> <p>中期：再発等→うつ状態…（寄り添う）→死への自覚・生への諦め→この世と家族との別れ。</p> <p>末期：別れがほぼ完了。頑張っ…は、禁句（寄り添う）。親しい人や友人さえ遠ざける…。 痛みが消え、意識が遠のく…できたら「ありがとうと、ほほえみ」の安らぎある終末。 命が尽きる…家族が寄り添い手を握る（自宅・病院、延命・蘇生治療なし）→終焉！</p> <p>◆死に逝く人も、対話する側（医療関係者・家族・友人）も、何等かの<b>死生観を固める</b>必要がある。 ◆死に逝く人との対話ができれば、死別の悲しみは相当緩和される。突然死（自死や事故）の場合は、死別の悲しみは深刻。対話する側は、死に逝く人の「思い」を理解し、寄り添い対話する。</p>			

\*年齢は、若年期（0歳～）、中年期（30歳～）、老年期（60歳～）の3段階に分けて考察。

\*死の受容の段階は、色々な場合が考えられるが、がんの場合を中心に考察。

\*参考文献：死に直面したあなたに（内田 誠著、死生学研究会）。